

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: New York in 2008)

《デリバリー・ボーイ》

以前、この場で《ハニー》《ウェイター稼業》というタイトルでウェイター時代の話に触れたことがあったが、今回はウェイター時代に味わったたわいのない楽しみのひとつについて。

自分が働いていたレストランはブロードウェイの劇場街にあったため劇場関係者をはじめ、音楽関係のスタジオなどから巻き寿司などデリバリーの注文も多かった。人気があったのはアメリカではお馴染みのカリフォルニア・ロール（＝アボガド、キュウリ、カニカマを裏巻ききく海苔が内側）で巻いて白ごまをふる）やマグロにマヨネーズベースのスパイシーなタレをつけて裏巻きで巻いたスパイシー・ロールなどだった。

そして、レストランにはルイス君という南米出身のベテランのデリバリー・ボーイがいた。ボーイといっても奥さんと子供もいて、立派に家族を養っており、自分より5~10歳近く年上だったはずだが、キッチンにいる南米出身のスタッフたちのまとめ役&良き兄貴的存在でもあり、デリバリーの他にキッチンでの仕事からその他いろいろな場面で大活躍し、とても頼りになる男だった。

そんなルイス君が時々デリバリーの注文を受けて訪れるある場所があった。レストランと同じ通りで9th Avenue 側に100~200mくらい離れた所にあったストリップ劇場だ。ストリップ劇場という呼び方が正しいのかは分からないが、金髪をはじめセクシーな外国人のおねえさんたちが、客が周りを囲むステージの上で下着姿でポールにまわり付いて踊り、紙幣のチップを貰うたびに下着の各場所に挟んで踊りをエスカレートさせ、更にチップをはずむ客に対してはいろいろなサービスしちゃうという感じだろうか…。

「お前、よく知ってるなあ！？」と突っ込まれそうだが、その辺りのことはまあ置いて…若かった自分は店が暇な時を見計らって、ルイス君がその店に行くのが分かるので「ルイス君、I go!」と快くデリバリー・ボーイ役を引き受けたのだった。袋詰めにされた出来た寿司を片手にその店まで歩いて行き、店の前に立つと必ずこの手に店にはお馴染みの光景…身長は1m80~90cmくらいあるであろう元アメフト選手のような屈強な黒人のボディガードが入り口の脇で仁王立ちしているのだが、自分のレストランからのデリバリーは日常的だったため、ルイス君も自分もほぼ顔パス状態。ボディガードたちも一瞬ニコッと微笑むと重いドアを親切に開けてくれたものだった。

顔パスというほど大げさなものではないが、何とも気分が良かったの覚えている。そして、ドアが開かれた瞬間に耳をつんざくように大音響で鳴り響く軽快なBGMを耳にしなが、薄暗い入り口付近を抜け店内に潜入する。勿論、ステージが目当たりにできるような場所を通り抜けるようなことはなかったが、通常はその店のオーナーやマネージャーからの注文だったので、彼らに直接寿司を手渡すために必然的に店内の奥の部屋付近まで入ることとなり、その際にあの“熱いステージ”をチラ見できるというわけで、よく同い年くらいのウェイター同士でこの店へのデリバリー・ボーイ役をジャンケンで争うこともあった。

若かった自分たちにとっては目の保養には十分だったが、仕事柄そういう類の店のオーナーやマネージャーは気前も良く、巻き寿司たった2~3本の注文だけで、また、歩いて届けられる距離でありながら、チップとして5ドルや10ドル近くのお釣りをそのままくれるようなこともあった。勿論、チップは丸ごとルイス君にあげるのを常として、ルイス君には大変勉強させてもらったと思っている。

また、一度だけデリバリー・ボーイ役で店内に潜入した時に、幸か不幸か知り合いの人が客として来ていて、鼻の下を伸ばしながら紙幣片手に金髪のおねえさんが踊る姿に釘付けになっている姿を目撃してしまったが、かなり恥ずかしい光景だった…。

あの頃から15年近く過ぎたが、ルイス君は今でも元気にデリバリー・ボーイ（おじさん？）として活躍しているようだ。ひとくちにデリバリー・ボーイといってもニューヨークにはまだまだ危険な場所もあり、あのストリップ劇場のような店へのデリバリーならまだ良いが、一般の住民からの注文も多く、中には得体の知れない人物だったり、あやしげなアパートの薄暗い地下階だったりすることもあるだろうし、夜になると静まり返って怪しげな人間以外は見かけることがないような危険な地域へ届けなければならないこともあるなど、ある意味で危険と隣り合わせの仕事といえるかもしれない。

そんな心労が絶えないルイス君の体を心配して、あのストリップ劇場へのデリバリー・ボーイ役を快く引き受けていたのだ…というのはバレーの言い訳になりそうだが、今思い出してもとても懐かしく、本当にたわいのないことだったかもしれないが、かけがえのない思い出となっている。ルイス君に感謝すると共に、健康に気を付けていつまでも元気に頑張ってくださいと思う今日この頃です。